

ミンククジラ オホーツク海・北西太平洋

(Common Minke Whale, *Balaenoptera acutorostrata*)



図 1. ミンククジラの親子連れ。胸びれの白斑と細く尖った頭部が特徴。
(野路滋撮影)

最近の動き

改訂管理方式 (RMP) の第 2 回適用試験は 2013 年に終了した。現在、系群問題を解決するために、定置網に混獲された個体への衛星標識装着技術の開発や、船上からの衛星標識装着の試みが行われている。また、長年目視調査が実施できなかったオホーツク海北東部においてロシアと共同で目視調査を開始した。

利用・用途

鯨肉は、刺身、大和煮（缶詰）、鍋物材料、ベーコンなど、ヒゲ板は工芸品の材料として利用される。かつては鯨油を工業原料として利用していたが、現在は需要がない。

漁業の概要

本種は、17 世紀に隆盛を迎えた古式捕鯨でも捕獲していたとされるが、記録に残されていない (Ohsumi 1991)。これは、当時ナガスクジラなどほかの鯨類と区別されていなかったためと推測される。本種についての捕獲の記録があるのは近代捕鯨になってからで、1920 年代末に盛んになった沿岸の基地式捕鯨業の一種である小型捕鯨業によるものである (Omura and Sakiura 1956)。本系群は 1987 年まで小型捕鯨業で商業的に捕獲していた。主な漁場は、三陸、道東沖

並びに北海道オホーツク海沿岸であった。春～夏のオホーツク海沿岸では、本系群とは別の東シナ海・黄海・日本海系群が混じっていることが知られている。

1988 年以降は国際捕鯨委員会 (IWC) が採択した商業捕鯨モラトリアムにより、商業捕鯨は停止状態にある。一方、IWC の改訂管理方式 (櫻本 1996、田中 2002) の適用試験で想定された系群構造仮説を検証することを目的に、我が国により国際捕鯨取締条約第 8 条に基づく捕獲調査 (JARPN) が 1994 ～ 1999 年まで行われ、毎年 100 頭を上限に捕獲した。2000 年以降、北西太平洋における鯨類と餌生物を巡る生態系の解明を目的とした捕獲調査 (JARPN II) の予備調査が行われ、2001 年まで沖合で 100 頭を捕獲した。2002 年からは本格的な調査が始まり、2004 年までは沿岸で捕獲した 50 頭を加え合計 150 頭、2005 年以降は沿岸で捕獲した 120 頭を加え 220 頭を上限に捕獲した。しかし、2014 年からは、国際司法裁判所の「南極における捕鯨」訴訟判決に照らし、調査目的を限定するなど規模を縮小して実施することとなり、捕獲上限は沿岸で 102 頭、沖合で 0 頭となった。また、非捕殺的方法（バイオプシーによる表皮採集や脱糞行動の観察と糞採集）の実証試験を開始した。

1930 ～ 2014 年の捕獲頭数の推移を図 2 に示す。本種は、1950 ～ 1980 年代半ばまで毎年 300 頭程度の捕獲が安定して継続していたことがわかる。近年、沿岸の定置網等による毎年 100 頭以上の混獲が報告されている。

生物学的特性

本種は、胸びれの白斑と細く尖った頭部から識別が可能である（図 1、図 3）。本系群の冬季の分布南限と分布限界については不明であるが、前者については少なくとも北緯 30 度付近まで、後者については東経 170 度までは分布する（図 4）。

本系群は冬季に繁殖のため低緯度海域（少なくとも北緯 30 度以南）を回遊し、初夏に北部太平洋岸を北上、夏季に大部分がオホーツク海を回遊する。また、夏季には千島列島東方沖合や北海道沿岸にも分布する。遺伝情報や形態情報か

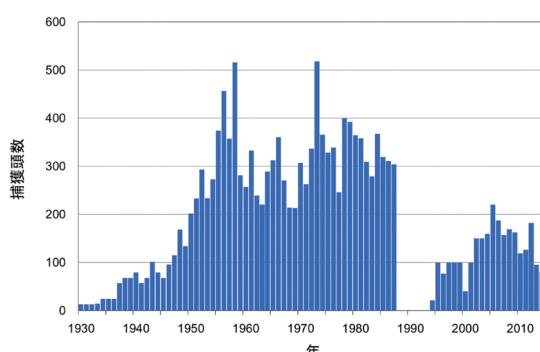


図 2. 北大西洋におけるミンククジラの捕鯨頭数の推移
(1930 ～ 2014 年) (定置網等による混獲を含まない)

ら、本系群は東経 170 度まで分布していることがわかっている。本種は、初夏の北部太平洋沿岸には未成熟個体が多い。成熟雌は夏季の高緯度海域（オホーツク海）に多く、夏季終わりには東部北海道沖に多いことが知られており、成熟段階による棲み分けをしているとされている。成熟雄は夏季に



図 3. 浮上したミンククジラ

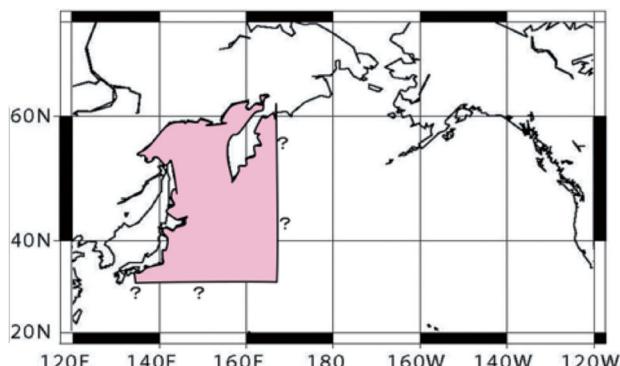


図 4. ミンククジラ（オホーツク海・北西太平洋系群）の分布図

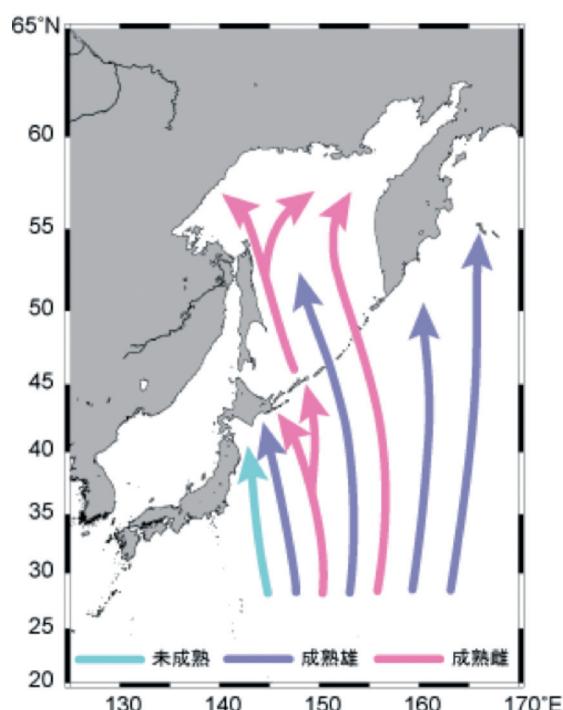


図 5. ミンククジラ（オホーツク海・北西太平洋系群）の春から夏の回遊経路 (Hatanaka and Miyashita (1997) を改変)

成熟雌より南方の千島列島東方を中心とした海域に分布する（図 5）。

本系群は、1～2月に交尾、10.5～11か月の妊娠期間を経て、体長（上顎先端から尾鰭切れ込みまでの直線距離）2.6 m の胎仔を出産する。なお、東シナ海・黄海・日本海系群の交尾期は 10～11 月で、本系群と異なる (Kato 1992)。性成熟体長は、雄 6.3 m、雌 7.1 m と推定されている (加藤 1990)。本種は年齢形質である耳垢栓の年輪が読みにくいため、耳垢栓が読みやすい南半球産のミンククジラから年齢査定をしており、性成熟年齢は 6～8 歳と類推されている。なお、南半球産のミンククジラは、別種のクロミンククジラ (Antarctic Minke Whale, *B. bonaerensis*) とされている。自然死亡係数は、0.11 と推定されている。

本種は、サンマ、スケトウダラ、カタクチイワシ、マイワシ、マサバ、イカナゴなど数種の魚類のほか、スルメイカ、オキアミなどを捕食する (Tamura and Kato 2003, Yoshida *et al.* 2015)。

資源状態

本系群の資源量は、我が国が実施した目視調査より、25,049 頭 (95% 信頼区間、13,700 - 36,600 頭) と推定されている (Buckland *et al.* 1992, Miyashita and Shimada 1994, IWC 1997)。この推定値は、ライントランセクト法 (Buckland *et al.* 1993, 岸野 1991, 宮下 1990) と呼ばれる方法に従って得られたものである。しかし、北半球産本種の発見の手がかりは、ほとんどがほんの一瞬海面上に出す体（背中）であり、非常に見えにくいため（図 3）、目視調査から密度を推定する際の調査線上の発見率； $g(0)$ が 100% という仮定が成り立たず、過小推定となる。それ以後、独立観察者によって目視調査が行われ、 $g(0)$ の値は、トップバレル（海面からの眼高差約 20 m）の観察者で 0.754、トップバレルとアップバーブリッジ（同約 12 m）の観察者全体で 0.822 と推定された (Okamura *et al.* 2009)。なお、1991 年当時の資源量の初期資源量 (1930 年) に対する割合は、61～88% と推定されている (Anon. 1992)。

【資源評価・水準・動向】

IWC では、Hitter・Fitter と呼ばれるプログラムを開発しており (de la Mare 1989)、これを用いて北西太平洋ミンククジラの資源評価を行った (袴田 1999)。資源評価はパラメータにいくつかの仮定をおいた上で解析が行われ、解析の結果、現実的な仮定の下では資源は増加傾向を示している。また、1999 年の成熟雌は初期資源量に比べて 70% 以上の大きさを持つと考えられており、資源は比較的高位にあると判断することができる。本プログラムによると、資源は近年増加傾向にある。

【系群の問題】

1980 年代より、IWC 科学委員会において、北西太平洋には日本海・黄海・東シナ海系群 (J 系群) とオホーツク海・西太平洋系群 (O 系群) の 2 つの系群が存在することが知ら

れていた。一方で、1993 年の同委員会年次会合で、北太平洋に分布するのは O 系群だけでなく、沖合海域に別の系群 (W 系群) 及び亜系群が存在する可能性が指摘された。このため、その解明を目的に 1994 年から開始された北西太平洋鯨類捕獲調査 (JARPN) では、亜系群が存在するとの仮説を否定する方向で結論が得られたように思われたが (後藤・上田 2002)、依然として北西太平洋に 2 ないし 3 系群が存在するという科学者と 5 系群が存在するという科学者の間で議論が続いている。さらに、2010 年から実施された第二回目の RMP 適用試験では、これら系群に加え黄海系群 (Y 系群) の存在が指摘され、系群構造仮説がより複雑になっていく。なお、夏期オホーツク海に J と O 両系群が回遊しているが、その割合を推定するためのバイオプシー調査を実施したが標本数の問題もあり結論が得られていない。これらの問題を解決するため、DNA 解析と平行して、衛星標識装着による移動追跡が試みられている。

管理方策

【改定管理方式 (RMP)】

本系群の商業捕獲は、資源状態にかかわらず停止状態にある。IWC は商業捕鯨のモラトリアムを行う一方で、対象資源の包括的資源評価を実施している。本系群の包括的資源評価は 1992 年に完了しているが、旧管理方式 (NMP) の下での資源分類については統一した見解に至らなかった。1993 年に京都で開催された IWC 年次会合に仕様書が提出された RMP には、フィードバック管理の考え方方が意識的に取り入れられており、徹底したシミュレーションテストを通して様々な不確実性の下でも安全な管理が行えるものとなっている (田中 1996a, b)。RMP による捕獲枠計算の最終段階において必要な情報は、目視調査から推定される資源量推定値と過去の捕獲実績であるが、系群構造の仮説は捕獲枠算定に大きく影響するため、本種の管理における最大の争点の一つとなっている。IWC は、本系群に対する RMP の適用試験を実施し (IWC 2002)、2003 年の会合でその結果が報告された (Anon. 2003)。それによると、1,104 通りのシミュレーションを行い、商業捕獲枠が算出されたが、最も妥当性が高い系群構造の仮説では、平均で 150 頭程度 (最小 63 頭、最大 311 頭) の捕獲枠が算出された。これをもって本系群への 1 回目の RMP 適用試験は終了した。その後集積された新たな情報も踏まえ、2010 年から 2 回目の RMP 適用試験を開始し、2013 年に終了したが、系群仮説等について合意に至らず、具体的な捕獲枠の決定には至っていない。

執筆者

外洋資源ユニット

鯨類サブユニット

国際水産資源研究所 外洋資源部 鯨類資源グループ

南川 真吾

国際水産資源研究所 国際海洋資源研究員

宮下 富夫

参考文献

- Anon. 1992. Repor of the sub-committee on North Pacific minke whales. Rep. Int., Whale. Commn., 42: 156-177.
- Anon. 2003. Report of the sub-committee on the Revised Management Procedure. Annex D. Report of the Scientific Committee, IWC. 100 pp.
- Buckland, S. T., Cattanach, K. L. and Miyashita, T. 1992. Minke whale abundance in the northwest Pacific and the Okhotsk Sea, estimated from 1989 and 1990 sighting surveys. Rep. Int. Whal. Commn., 42: 387-392.
- Buckland, S. T., Anderson, D.R., Burnham, K.P., and Laake, J.L. 1993. Distance sampling:Estimating abundance of biological populations. Chapman & Hall. London, UK.
- de la Mare, W. K. 1989. Report of the Scientific Committee, Annex L. The model used in the Hitter and Fitter program. Rep. Int. Whal. Commn., 39: 150-151.
- 後藤睦夫・上田真久. 2002. 鯨類における遺伝学的手法を用いた系群判別. In 加藤秀弘・大隅清治 (編), 鯨類資源の持続的利用は可能か. 生物研究社. 99-105 pp.
- 袴田高志. 1999. ヒッター・フィッタープログラムについて. 鯨研通信, (401) : 1-8.
- Hatanaka, H. and Miyashita, T. 1997. On the feeding migration of Okhotsk Sea . West Pacific stock of minke whales, estimates based on length composition data. Rep. Int. Whal. Commn., 47: 557-564.
- International Whaling Commission. 1997. Report of the Scientific Committee, Annex, J. Rep. Int. Whal. Commn., 47: 203-226.
- International Whaling Commission. 2002. Report of the Sub-Committee on the Revised Management Procedure, Annex D. J. Cetacean Res. Manage., 4 (Suppl.) :93-147.
- Kato, H. 1992. Body length, reproduction and stock separation of minke whales off northern Japan. Rep. Int. Whal. Commn., 42: 443-453.
- 加藤秀弘. 1990. ヒゲクジラ類の生活史,特に南半球産ミンククジラについて. In 宮崎信之・粕谷俊雄(編), 海の哺乳類, サイエンティスト社. 128-150 pp.
- 岸野洋久. 1991. ライントランセクト・サンプリングによる鯨類のモニタリング. In 櫻本和美・加藤秀弘・田中昌一(編), 鯨類資源の研究と管理. 恒星社厚生閣. 117-131 pp.
- 宮下富夫. 1990. 鯨類資源の資源量推定 - 現状と問題点 - . In 宮崎信之・粕谷俊雄 (編), 海の哺乳類 その過去・現在・未来. サイエンティスト社. 167-185 pp.
- Miyashita, T. and Shimada, H. 1994. Minke whale abundance in the Okhotsk Sea, the Sea of Japan and off the Pacific coast of Northern Japan estimated from sighting data. Paper SC/46/NP6 presented to the IWC Scientific Committee, May 1994 (unpublished) . 9 pp. [Paper available from the IWC office]
- Okamura, H. Miyashita, T. and Kitakado, T. 2009. Revised

- estimate of $g(0)$ for the North Pacific minke whale. Paper SC/61/NPM5. 7pp.
- Ohsumi, S. A review on population studies of the North Pacific minke whale stock. Paper SC/43/Mi26 presented to the IWC Scientific Committee, 1991. 29 pp.
- Omura, H. and Sakiura, H. 1956. Studies on the little piked whale from the coast of Japan. Sci. Rep. Whales Res. Inst., Tokyo, 11: 1-37.
- 櫻本和美. 1996. クジラ類資源の管理と IWC. In 北原 武(編), クジラに学ぶ. 成山堂書店, 東京. 98-122 pp.
- Tamura, T. and Kato, H. 2003. Long-term changes in food and feeding habits of the common minke whales in western North Pacific region. Abstract of PICES twelfth annual meeting, Seoul, Republic of Korea. 192 pp.
- 田中栄次. 2002. IWC 改訂管理方式. In 加藤秀弘・大隅清治(編). 鯨類資源の持続的利用は可能か, 生物研究社. 45-49pp.
- 田中昌一. 1996a. 鯨資源の改訂管理方式 (I). 鯨研通信, (391) : 1-6.
- 田中昌一. 1996b. 鯨資源の改訂管理方式 (II). 鯨研通信, (391) : 1-7.
- Yoshida H., Ito, N., Kishiro, T., Miyashita, Nakai, K., Nakamura, G., Maeda, H., Ishida, K., Takahashi, M., Ota, M., Furuyama, Y., Kato, K., Hayashi, R., Hiruda, H., Kumagai, S., Sakamoto, N., Kimura, Y., Teshima, I. and Kato, H. 2015. Cruise Report of the Second Phase of the Japanese Whale Research Program under Special Permit in the Western North Pacific (JARPN II) in 2014 (Part III) - Coastal component off Kushiro - Paper SC/66a/SP presented to the IWC Scientific Committee 14pp.

ミンククジラ (オホーツク海・北西太平洋) の資源の現況 (要約表)

資 源 水 準	高 位
資 源 動 向	増加傾向
世 界 の 捕 獲 量 (最近 5 年間)	な し (商業捕鯨モラトリアムが継続中)
我 が 国 の 捕 獲 量 (最近 5 年間)	捕獲調査により 81 ~ 182 頭. 2014 年からは捕獲調査により年間 102 頭が上限
管 理 目 標	商業捕鯨モラトリアムが継続中であり、未設定
資 源 の 状 態	西部北太平洋では目視調査により増加傾向判明
管 理 措 置	商業捕鯨モラトリアムが継続中
管理機関・関係機関	IWC
最新の資源評価年	2013 年
次回の資源評価年	未 定

付表 1. 北西太平洋でのミンククジラの捕獲頭数 (定置網等による混獲を含まない)

年	雄	雌	合計	年	雄	雌	合計
1930	7	6	13	1980	200	164	364
1931	7	6	13	1981	216	142	358
1932	7	6	13	1982	167	142	309
1933	8	6	14	1983	138	141	279
1934	13	11	24	1984	198	169	367
1935	13	11	24	1985	192	127	319
1936	13	11	24	1986	177	134	311
1937	33	24	57	1987	182	122	304
1938	38	30	68	1988	0	0	0
1939	38	30	68	1989	0	0	0
1940	45	34	79	1990	0	0	0
1941	33	24	57	1991	0	0	0
1942	38	30	68	1992	0	0	0
1943	59	42	101	1993	0	0	0
1944	45	34	79	1994	18	3	21
1945	38	30	68	1995	91	9	100
1946	45	51	96	1996	63	14	77
1947	55	60	115	1997	87	13	100
1948	81	87	168	1998	89	11	100
1949	72	62	134	1999	71	29	100
1950	125	77	202	2000	35	5	40
1951	113	120	233	2001	93	7	100
1952	114	179	293	2002	117	33	150
1953	115	119	234	2003	114	36	150
1954	111	162	273	2004	137	22	159
1955	166	208	374	2005	154	66	220
1956	238	218	456	2006	134	53	187
1957	162	195	357	2007	107	50	157
1958	225	291	516	2008	108	61	169
1959	123	158	281	2009	99	63	162
1960	114	143	257	2010	71	48	119
1961	145	188	333	2011	82	44	126
1962	102	137	239	2012	114	68	182
1963	96	124	220	2013	61	34	95
1964	129	160	289	2014	51	30	81
1965	127	185	312	合計	8,535	7,376	15,911
1966	161	199	360				
1967	111	159	270				
1968	77	137	214				
1969	74	139	213				
1970	150	157	307				
1971	142	121	263				
1972	128	209	337				
1973	263	255	518				
1974	177	189	366				
1975	174	154	328				
1976	151	188	339				
1977	161	85	246				
1978	245	155	400				
1979	262	130	392				